

国 語 (B方式)

注 意

1. 問題は全部で10ページである。
2. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。
3. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

詩画集というものがある。二十世紀の美術家と詩人のあいだでは、多くの詩画集が作られているし、そのあるものはすばらしいものである。日本でも最近はやや少なからぬ詩画集が制作されている。

九世紀後半、漢詩と絵が組み合わせられて屏風芸術の第一期を作り、十世紀に入るとすぐのころからは和歌と絵の組み合わせに変わって大量に作られたようである。この絵と歌の総合体は、つまりあの当時の「詩画集」だったとはいえないだろうか。もちろん、屏風は、寝殿造りという仕切りの少ない家屋構造にあつて、必要欠くべからざる家具であつたわけだが、同時にそれが装飾品として、絵画における唐絵^{*}から大和絵への移行、詩歌における漢詩から和歌への移行という、九世紀・十世紀の交に生じた日本芸術史上の一大転機に極めて深くかかわつたとき、それはまさしく、詩画集という独立した芸術作品としての位置と意味をも持つにいたつたといつていいだろう。

私がいこれらの屏風の消滅を残念に思う理由のひとつは、それが美術品として見た場合にも詩歌史上の産物として見た場合にも、「世俗性」という点において、他のどんな美術品、詩歌作品にも劣らぬ意味と価値を持つていたはずだと思つてゐる。私たちが今見ることのできる奈良朝、平安朝の美術の遺品は、絵画に關していえば、宗教画か、しからずんば絵巻に限られるといつてよい。高僧や貴族・武家の肖像画も平安末期になれば現れるが、平安中期までのものには關しては、宗教画と絵巻物ばかりといつてよい。それらは国宝とか重文の指定を受けて私たちにもよく知られている。そのため、古い時代の絵といへばこの種のものに限られていたといふ早とちりさえしかなないのである。

けれども、事實はそうではなかつた。皇族や貴族の宮殿・邸宅では、寺院における仏画にまさるとも劣らぬ数の、風俗を主題とした絵が飾られ、鑑賞されていたのである。ここでいう風俗画とは、春夏秋冬の風物と行事を描く月次絵、家の内部でくりひろげられる男女の交渉を中心とした屋内風俗の絵、あるいはまた名所・歌枕など旅情を誘う土地の絵、唐絵の影響をたくみに消化した大和絵の日本の山水画や脱俗隱士の閑居姿を描いた絵、また農耕漁労を中心とした庶民生活の描写その他、広範囲にわたる主題を

ひとつにくくる言葉として用いたのだが、つまりは A が、屏風絵の主題であつたといつていいだろう。『古今集撰進の勅
が下つた延喜五年以後のいちじるしい現象として、紀貫之をはじめとする当時の歌人たちの家集に屏風歌が激増するのは注目すべ
きことだが、それらの歌の詞書ならびに画題を眺めてみるだけでも、世俗的主題の広がりについておよその概念はつかめる。そし
てそれは、ある種の魅力的な空想を私たちに許すのである。

それにしても、なぜこれらの屏風は現存しないのか。当然のことながら、それらはその用途において最も損耗しやすいものだつ
た上、たとえば寺院の仏画が最も聖なるものとして秘蔵されたような具合には、所蔵者によつて秘蔵されることがなかつたから、
早いうちに消滅してしまつたのである。天皇、上皇などの場合は一応別だが、これらの所有者の貴族たちは、古代から中世への転
換の時期に、多くは没落していつた。戦火や自然の災害によつて、彼らの邸宅は灰となり、あるいは朽ちはてたが、屏風はたとえ
ば絵巻とはちがつて、手軽に持ち運び安全な場所へ移すということもできなかったから、家と一緒に消滅するほかなかつた。さら
にまた、武家の時代になれば、世俗画の主題にも、大きな嗜好ⁱの変化が生じるのは当然で、王朝的¹主題は、ある種のノスタルジー
を一時はかきたてたかもしれないが、まもなく中世のダイナミックで荒々しい動きをもつた主題に取つて替わられたにちがいな
い。万一、幸運にも戦火をくぐつて生きのびた屏風があつたとしても、それらは武家や商人の屋敷の片隅で、冷淡な好奇のまなざ
しに時々は見つめられながら、静かに埋もれて朽ちていつただろう。材質もまた、キヌⁱⁱでなく紙であつただろうから、歳月をしぶ
とく耐えぬくには適していなかつた。紙を用いてあつても絵巻の場合なら、保存の条件に格段の相違があり、そのために私たち
は今日、屏風絵よりもやや時代が下るものにはちがいないが、ともかくも「源氏物語絵巻」「信貴山縁起」「伴大納言絵詞」以下の絵巻
を見ることができのだし、屏風絵全盛期よりほぼ二世紀さかのぼつた時代の「絵因果経」もその一部が現存しているのである。
こういうわけで、私たちは紀貫之らの歌人がみずからの歌を色紙形に書いて、当代一流の画工とともに共同の作品に仕立てあげ
た詩画集を見る機会を失つたのである。

私はときどきこのことを考えては、惜しいと思う。以前、南蛮屏風について小文をものしたことがあるが、そのときにも、屏風
というものがその用途の性質上、きわめて破損しやすいものであることを痛感した。保存状態の良好なものももちろんあつたが、

子供がいたずらして傷つけたと思われるような汚れも含めて、日常生活の実用品であるために避けられなかった破損を目にするたびに、「屏風というもの」B を見る思いがした。

『伊勢集』には、伊勢がその後宮で暮らしていた宇多天皇の宮廷で、長恨歌の屏風絵が行われていたことが書かれている。また『菅家文章』巻二の仁和元年（八八五）のくだりには、右近衛中将平正範が太政大臣藤原基経の五十の賀のため屏風絵を調進することになり、その屏風絵に題すべき詩を菅原道真に依頼したこと、道真がこれに応じて五篇の詩を作ったことがしるされている。五篇の詩の、題だけあげれば、「郊外に馬を翫ふ」「道士が恒春の酒を勧むるを謝す」「居を卜む」「南園に小楽を試む」「園池の晩の眺め」。詩の中には、中国の神仙思想や隠士閑居の風流に憧れる気持ちが強く流れている。しかし、その絵は、はたしてどんな図柄だったのだろうか。まったくの唐絵のスタイルだっただろうか、それともすでに大和絵のスタイルが潜在的には芽生えていただろうか。道真には、『菅家文章』巻五、寛平四年（八九二）のくだりにも、「田家閑適」および「漁父詞」という二篇の屏風絵に題した詩がある。後者はわけても愛唱するに足る七言絶句だと思うので、引いておきたい。

2 抱膝舟中酔濁醪 膝を抱き舟の中にして、濁醪に酔ふ

此時心与白雲高 此の時、心は白き雲とともに高し

潮平月落帰何処 潮平に月落ちて、何れの処にか帰らむ

満眼魚蝦満地蒿 満眼の魚蝦、満地の蒿

この寛平期の詩になると、情緒はよほど日本的になつていくようにも感じられる。寛平元年の頃には例の「寛平御時后宮歌合」が催され、寛平六年にはほかならぬ道真が大使に任命された遣唐使一行の唐への派遣が停止され、以後沙汰やみになるという大きな転機があった。いずれも、宇多朝において顕著になつた唐からの日本の相対的独立という傾向を象徴的に示す出来事だった。道真はそういう転換期の重要な証人だったので、それゆえにたとえば右の「漁父詞」のような詩が、どんな絵と組み合わせられて鑑賞されていたか、それを見ることができたらどれほど興味深いことかと思われるのである。

道真よりもほぼ三十歳ほど若かつた新世代の詩人、それが紀貫之である。彼が宇多朝を代表する漢詩人なら、これは次の醍醐朝

を代表するやまとことばの詩人だった。そして、当代の代表詩人たるからには、当然、屏風歌の名手でなければならなかったし、貫之はそれのまさに花実兼ねそなえた第一人者にほかならなかった。

『貫之集』には八百六十四首の歌が見えるが、そのうち実に五百三十九首が屏風歌である。これほどの高い比率で屏風歌すなわち他からの注文の歌を作っていた歌人は、もちろん他にあるわけもない。

このことは、私が右に述べてきたことの筋道に沿っていえば、貫之は美術における風俗画あるいは世俗画というジャンルに

C

ということを意味するだろう。

ところで美術におけるこの領域を詩歌の領域に移してみると、どういふことがいえるのか。

圧倒的に多いのは、一月から十二月までの月次絵に合わせるための季節行事の歌であり、春夏秋冬の歌である。そしてそれに彩りを添える形で、都の内外の屋内・屋外における男女の語らいや行楽、そしてもちろん恋の歌が、少なからず作られた。

このことは、貫之の屏風歌が、いやおうなしに京都周辺の日本の風土、その季節の移りゆきを、こまかに観察しては体系化してゆく作業をとまっていたということの意味するだろう。彼は一月、二月、三月と分かれたそれぞれの季節に、何らかの詩的注釈をほどこすという作業を行ったわけで、それは必然的に、彼の名声を慕う同時代や後代の人々に、一種の規範として受けつがれてゆくことにもなった。

つまり、この当時の風俗画あるいは世俗画の中核をなしていたのは、実は季節感のいやが上にもこまやかな強調という主題だったということである。少なくとも、現存する歌のほうから眺めるなら、このことは疑いようのない事実であった。それゆえにこそ、私は、もし絵のほうも残っていたら、突き合わせてどんなに面白い比較ができたことか、と思つのである。

『貫之集』の屏風歌はおおよそのところ制作年代順に並べられていて、洩れなく彼の後半生を覆っている。したがってその歌風にも変化が見られるが、ここではふれない。歌をいちいち引いてみることも紙数の関係でできないので、目を惹く詞書を拾ってみよう。

「延喜六年、月次の屏風八帖が料の歌、四十五首、宣旨にてこれを奉る、二十首」とある屏風歌の場合——子の日遊ぶ家・二月初

午に稻荷詣でしたところ・弓の結・三月田かへすところ・忘れ草・三月晦・五月照射・六月鶉河・六月祓・七月七日・織女・八月駒迎へ・小鷹狩り・衣うつ・志賀の山越え・十一月神楽・大鷹狩り・臨時の祭り・十二月仏名。

こうして眺めれば、これらが後世の「歳時記」の季題にいかさまつすがつながつてゆくか、一目瞭然であろう。

「承平五年十二月、内裏の御屏風の歌、仰せによりて奉る」の場合――

女、簾のもとにゐたるに、男ものいふ。桜の花咲けり

子の日して、車のわかるるところに馬に乗れる人、松を車に送る

女、實の子にさし入りたる桜の花折りたる。馬に乗りて道ゆく法師、垣越しにうちよりて見る

馬に乗りたる男ども、故郷と思しきところにうちよりて桜を折る（以下省略）

これらの詞書は、また別種の興味をひく。詞書からかなり詳しい D が想像されるからである。場合によつては、詞書の簡潔な叙述の方が、貫之の手慣れた歌よりもずっと面白く感じられることもある。

もうひとつ、貫之最晩年の屏風歌を引いてみる。これは歌も共に。

「同じ天慶四年正月、右大將殿「藤原実頼」の御屏風の歌、十二首」とある。

元日、人の家に客人あまた来たり、あるは家のうちにいり、あるは庭に降り立ちて、梅の花を折る

春立たば咲かばと思ひし梅の花めづらしびにや人の折るらむ

人の家に客人あまた来て、柳・桜のもとに群れるて遊びするに、花散りまがふ

青柳の色はかはらで桜花散るもとにこそ雪は降り（Ⅰ）

藤の花松にかかれる

昔いかに頼めたればか藤浪の松にしもなほかりそめけむ

男、神の社に詣でたる

祈り来る神ぞ思へばたまほこの道の遠さも知られざり（Ⅱ）

男女の木のもとに群れるたるところに、舟に乗りて渡る人あるが、指をさしても云へるやうなり。そのさま時鳥を聞けるに似たり。

かのかたにはや漕ぎよせよ時鳥道に鳴きつと人に語らむ

海のほとりなる人の家に、女、簾を上げて海を見出だせり。そのなかにいたく老いたる女あり。

浜辺にて年経る人は白波のともに白くぞ見えわたり（Ⅲ）

人々秋の野に遊ぶ

秋の野と萩の錦は女郎花たちまじりつつ織れるなり（Ⅳ）

女はなの池のほとりなる対に群れるて水の底を見る

月影の見ゆるにつけて水底を天つ空とや思ひまどはむ（以下略）

歌には何とも出来のよくないものもある。画題の範囲が限られていたから、貫之のようにしばしば依頼を受けた場合、歌に新趣向を盛るのはこれでなかなか難しいことがあつたろう。それでも、右の一連には別種の興味があつて、それは、これらの歌には⁵『土佐日記』の歌と格調の共通した歌が多いことである。『土佐日記』の執筆時期はこの屏風歌より数年前と考えられるが、貫之のこれらの歌の調べが、『土佐日記』所載の歌に通ずるものを持つていふことは、何やら興味ある問題をはらんでいるようにも思われる。実際、「月影の見ゆるにつけて水底を天つ空とや思ひまどはむ」といふ歌のごとき、ただちに『土佐日記』中の秀作、「影見れば波の底なる久方の空漕ぎわたるわれぞわびしき」を思い出させるのである。

それにしても、こうして見てくると、貫之の歌にも、またその詞書から想像される絵の内容にも、もはや唐風のところはまったくなくないといつていい。道真の時代からわずか半世紀ほどの間に、とにかく⁶大きな変化が貴族階級の美意識に生じたということが、これでわかるのだ。『古今集』というものの出現の意味も、こういう背景を考えあわせることによつて一層鮮烈に実感されるだろう。貫之時代の屏風絵は、まさしく、京都という盆地の、山もあれば川もある穏やかな自然、またそこにめぐり来てはめぐり去る四季のこまやかな変化に対して、ひたすら寄り添つていこうとした当時の貴族階級の、現世肯定の世界観を、こよなくみこ

とに示すものであつたはずである。それこそ、屏風絵の主題がすなわち風俗画であり世俗画であつた理由でもある。私はそれらの消滅を惜しんだが、しかしそれらは、本質的に、時代とともに消え去るべき運命のものであつたともいえる。だからこそ、それらを思い描くとき、私の中には、儂はかないけれども親しみ深く、またいとおしい幻の絵図が、何枚も浮かんで消え、消えては浮かぶのである。

(大岡信「幻の世俗画」による)

[注]

* 唐絵から大和絵への移行 || 唐絵は中国風の風景、描法で描かれた絵。大和絵は日本風の風景、描法で描かれた絵のこと。前者には漢詩を添え、後者には和歌を添えるのが一般的。

* 屏風歌 || 屏風絵に貼り付けるために詠まれた歌。屏風は絵と歌とが一体のものとして鑑賞される。

* 『菅家文章』 || 菅原道真の詩文集。

問一 文章中の空欄

A

に入る最適な語句を、次のア〜オから選び、記号で答えよ。

ア 貴族と庶民の生活を対比させたもの

イ 自然を多面的に描写したもの

ウ 世俗の生活一切をひつくるめたもの

エ 非現実的な空想に満ちたもの

オ ひとつの場面として独立したもの

問二 文章中の二重傍線部 i 「嗜好」の読みを平仮名で記し、二重傍線部 ii 「キヌ」を漢字に改めよ。

問三 傍線部1「ある種のノスタルジー」とあるが、それは具体的にはどのようなことか。二十字以内でわかりやすく説明せよ(句読点を含む)。

問四 文章中の空欄 B に入る最適な語句を、次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア 価値 イ 宿命 ウ 主題 エ 情緒 オ 背景

問五 傍線部2「抱膝舟中酔濁醪に、下段の訓読を参考にしつつ返り点を施せ(送り仮名等の仮名は不要)。

問六 傍線部3「彼」とは誰を指すか。人名を漢字で答えよ。

問七 文章中の空欄 C に入る最適な語句を、次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア 飽き飽きしていたはずだ

イ 背を向けていたはずだ

ウ 強い関心を持つていたはずだ

エ 深く通じていたはずだ

オ 自ら手を染めていたはずだ

問八 傍線部4「何らかの詩的注釈をほどこす」の意味するところとして最適なものを、次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア 季節がわからない絵に季節感を与えていく作業

イ 季節の移りかわりを、絵とは別個の視点から描き出す作業

ウ 季節の絵の不充分なところに、詩人の目で修正を施す作業

エ 季節の情感を分析し、和歌のことばに移し換えていく作業

オ 季節の違いについて学問的な考察を行う作業

問九 文章中の空欄

に入る最適な語句を、次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア 歌の内容

イ 絵の図柄

ウ 作者の年齢

エ 制作の事情

オ 物語の筋

問十 文章中の(Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)(Ⅳ)に、助動詞「けり」を適切な形に活用させて入れよ。

問十一 傍線部5「『土佐日記』は、

と

に正しいことばを入れよ。

もすなる日記といふものを、

もしてみむとてするなり」という文で始ま

問十二 傍線部6「まことに大きな変化」とあるが、それは何風から何風への変化か。「風から風への変化」と

いう形で答えよ。

問十三 傍線部7「本質的に、時代とともに消え去るべき運命のものであった」とあるが、どうしてそのように言えるのか。その理

由として最適なものを、次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア 調度としての屏風は、平安時代に特有のものであったから。

イ 屏風絵は損耗しやすく、また燃えやすいものだったから。

ウ 風俗画あるいは世俗画は、後世には好まれなかったから。

エ 平安時代の貴族が持つ、固有の美意識が反映されているものだったから。

オ 平安時代末期までには、絵といえば屏風絵しか存在していなかったから。

問十四 次のア～オから本文の内容に合致するものを一つ選び、記号で答えよ。

- ア 屏風絵と屏風歌とは、基本的に同一の人間によって制作されることが多い。
- イ 屏風絵に添えられた屏風歌には、意欲の乏しい、つまらない内容のものが多い。
- ウ 平安時代の絵画には、屏風絵のような世俗画・風俗画しか存在しない。
- エ 大和絵の画題には季節を主題としたものが多いが、漢詩の画題には季節感が乏しい。
- オ 屏風絵は絵巻のように持ち運ぶことができないため、消滅しやすい。

